

遺跡の学び館開館10周年特別展

もりおおか発掘物語

盛岡市遺跡の学び館

開催にあたって

盛岡市遺跡の学び館は、開館してから今年で10年目を迎えました。

平成16年(2004)6月の開館以来、遺跡調査の中核施設として発掘資料の調査・研究を行い、数々の成果を挙げ、それらの成果を公開する場所として、これまでにさまざまなテーマ展や企画展を実施するとともに、関連する講座・講演会及び考古学や歴史に関連する体験学習会も数多く開催してきました。

当館は、平成12年12月に発生した埋蔵文化財の整理及び収蔵管理施設の火災事故を教訓に、火災・地震等に対して文化財を保全する災害に強い施設として建設され、東日本大震災時においても破損等の被害は少なく即時復旧することができました。

今回は10年の節目として、これまでの盛岡の発掘の歴史と、国・県・市の指定文化財(考古資料)をはじめ、数多くの出土品を一堂に会した特別展「もりおか発掘物語」を開催しました。

遺跡や貴重な出土品をご覧いただき、郷土の歴史や文化に触れて頂く機会になれば幸いです。

最後になりましたが、特別展開催及び本書の刊行にあたり、御協力をいただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。

平成26年10月

盛岡市遺跡の学び館

目次

開催にあたって	2	iv	7～8世紀の古墳	39
目次		v	エミシのムラ	42
開催要項		vi	城柵の造営とそれ以後の集落	45
後援・協力		vii	古代末期の盛岡	48
I 盛岡の発掘調査の歴史		viii	平泉文化以降～安土桃山時代	50
1. 戦前の調査研究	4	ix	祈りと信仰の世界	52
2. 昭和20～50年代の発掘調査	5	x	安倍館遺跡と里館遺跡	55
(1) 川目遺跡	6	xi	盛岡城築城と城下町の整備	57
(2) 稲久保遺跡	7	xii	盛岡とやきもの文化	60
(3) 大館堤遺跡	8		挿図・年表・文献一覧	
(4) 小屋塚遺跡	9		□盛岡の主な遺跡マップ	18・19
(5) 厨川柵擬定地	10		□展示資料一覧	65
(6) 日戸遺跡	12		□盛岡周辺の史跡・遺跡調査関係年表	66
3. 昭和50年代の調査とその体制	13		□考古学関連一般書・論文・雑誌及び 遺跡発掘調査報告書目録(盛岡市分)	72
4. 市町村合併と大規模区画整理事業	14		コラム	
5. 業務量の増大化と施設管理	14		□伏魔王国 もりおか	28
II 史跡指定と保存整備			□盛岡市内の古墳	41
1. 太田方八丁遺跡から史跡志波城跡へ	15		□絵図に描かれた「方八丁」	47
2. 史跡整備と活用	16		□失われた土器	51
3. 盛岡城跡の保存と石垣整備	17		□近世の礫石経塚	54
III 発掘された盛岡			□大名家の墓所調査	59
i 旧石器時代から縄文へ	20		□盛岡城の土塁	63
ii 北と南の文化交流	36		□城下図に描かれた窯場のけむり	64
iii 北の古墳文化	38			

開催要項

□盛岡市遺跡の学び館 開館10周年記念 特別展

「もりおか発掘物語」

会期/平成26年(2014)10月11日(土)から

平成27年1月18日(日)まで

会場/盛岡市遺跡の学び館企画展示室

主催/盛岡市遺跡の学び館

後援/(順不同)岩手考古学会 岩手史学会 岩手日

報社 朝日新聞盛岡総局 読売新聞盛岡支局

毎日新聞盛岡支局 時事通信社盛岡支局 共

同通信社盛岡支局 河北新報社盛岡総局 産

経新聞盛岡支局 デーリー東北新聞社 盛岡

タイムス社 岩手日日新聞社 NHK盛岡放

送局 IBC岩手放送 テレビ岩手 めんこ

いテレビ 岩手朝日テレビ 岩手ケーブルテ

レビジョン エフエム岩手 ラジオもりおか

月刊アキュート マ・シェリ 情報紙遊悠

ぼらん(順不同)

関連企画

【特別講演会】

演題/「盛岡発掘物語」

講師/嶋 千秋氏

日時/平成26年12月7日(日)13:30～15:30

会場/盛岡市遺跡の学び館研修室

【学芸講座】

①「古代末期から中世の検証」

10月26日(日)13:30～15:00

講師:当館職員

②「盛南地区の古代集落」

11月9日(日)13:30～15:00

講師:当館職員

協力者(順不同敬称略)

機関等 岩手県教育委員会生涯学習文化課(公財)岩

手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 岩

手県立博物館 盛岡市都南歴史民俗資料館

盛岡市立図書館 もりおか歴史文化館

個人 高橋 昭治 武田 良夫 吉田 義昭

図録執筆・編集

菅野 美佳 神原 雄一郎 菊地 幸裕 木幡 里美

今野 公顕* 佐々木 亮二* 鈴木 俊輝 千田 和文

津嶋 知弘 樋下 理沙 室野 秀文 山岸 佳澄

山野 友海

*は歴史文化課事務局勤務

○本図録は、昭和30～40年代の日本考古学年報・岩手大学学芸学部研究年報の印刷物から写真を転載し、また本文については、平成16年度以降の当館並びに盛岡市教育委員会歴史文化課が編集・刊行した図録・講演会・講座資料及び調査概報・略報から引用し、再編集したものです。

○本文中、遺構の名称については、当時の表記どおりとしました。※当時の縄文～古代の竪穴住居跡は、現在、「竪穴建物跡(住居)」と表記されています。

○開催期間中、一部展示替えをする場合があります。

○表紙写真

上段:「大新町遺跡第19次調査の発掘調査風景」(昭和63年度)

左上:「国指定史跡盛岡城跡航空写真:南東方向から」

右上:「国指定史跡志波城跡外郭南門:南東方向から」

左下:「県指定史跡大館町遺跡竪穴住居群検出状況:東方向から」

右下:「川目C遺跡:北西方向から」

○裏表紙写真

・遺跡の学び館

I 盛岡の発掘調査の歴史

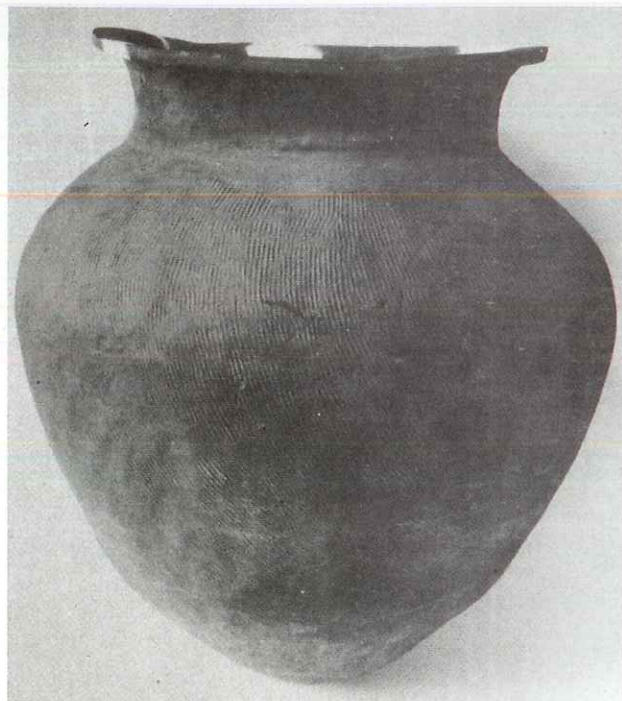
1. 戦前の調査研究

岩手県内における遺跡や遺物など考古学に関する研究については、明治時代後半から本格的に手がけられましたが、江戸時代の記録にも「矢尻石」や「土器出土」などという記述を散見することができます。

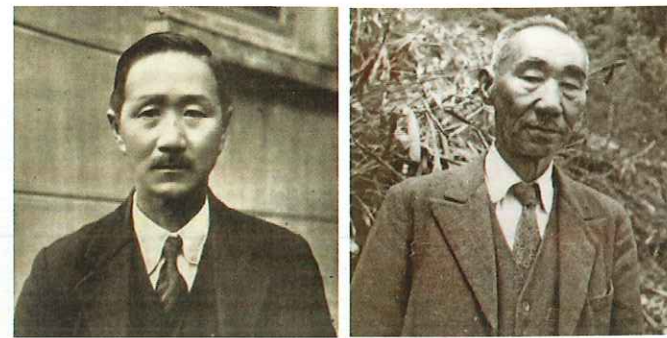
その古記録類の目録については昭和30年代、盛岡市公民館に勤務されていた吉田義昭氏が纏められた『岩手県関係考古学文献目録』（吉田1956）に掲載され、また『岩手県考古学年譜』（吉田1959）には年表形式でその記述内容の概略も紹介されています。

古墳を崩したところ、中から太刀や金具などの遺物が出土したこと、また東北を遊覧した菅江真澄の紀行文にも考古資料が多く紹介されていたことなどが掲載されていますが、坂上田村麻呂・安倍貞任・源義家（八幡太郎義家）らの事績に関わる伝承が多い盛岡城下やその周辺からの発見例の記述はあまり多く見られません。

唯一、『飯岡鹿妻穴堰乃由来』に「享和元年九月四日太田方八丁附近より大形土器出土 高サ三尺 周一丈三尺 口径三尺八寸」という記述が残されていますが、伝世している資料の中には、昭和元年（1926）志波城跡ないし北東部に隣接する林崎遺跡出土の須恵器大甕が伝えられています。法量に違いが見られます。



太田方八丁周辺出土とされる須恵器大甕
器高60.5cm、口径42.0cm



菅野義之助氏（1874-1943）と小田島祿郎氏（1881-1953）

明治時代に入り、日本の考古学が急速に発展を遂げたのは、明治10年（1877）、E・S・モースの大森貝塚の発掘と言われており、その後明治20年代に入ると、三陸沿岸部の貝塚調査を契機に、研究者の来県も多くなり、岩手県内の考古資料も広く紹介されるようになりました。

大正9年（1920）、「岩手県史蹟（跡）名勝天然紀（記）念物調査会」が発足し、伊能嘉矩・菅野義之助・小笠原謙吉・小田島祿郎・鳥羽源藏氏らのメンバーが中心となって県内の考古学研究が徐々に発展の兆しを見せてきます。

その中でもとりわけ小田島祿郎氏の業績は高く、明治14年（1881）、二戸郡浄法寺村（現二戸市浄法寺）生まれの小田島氏は、岩手師範学校卒業後、県内各地で教鞭をとりながら、考古学や郷土史研究を進め、その分野は多岐にわたり、縄文時代の遺跡や出土遺物、仏像・古銭・金石学などでも先駆的業績を残されました。大正12年（1923）、岩手県史蹟名勝天然記念物調査会委員に任命され、それ以降の30年にも及ぶ研究活動の理念には史跡・遺跡の“保存”という姿勢が貫かれていました。

大正13年（1924）、気仙郡広田村（現陸前高田市広田町）に転勤となり、この地は古くから全国的に知られた貝塚の多い地域でもあることから、自ずと本人の興味も移り、昭和9年（1934）、現在の大船渡市の蛸の浦・下船渡の両貝塚、陸前高田市の中沢浜貝塚の国史跡指定においては内務省考査員柴田常恵氏への強い働きかけも行なわれたとされています。

その後、大正14年（1925）に江刺郡岩谷堂実科女学校教諭、昭和2年（1927）に同校を退職し嘱託となり、昭和5年（1930）に教職を辞し、盛岡市内に転居して保険会社員の傍ら、発掘調査に従事しながら、昭和8年（1933）に自宅に「岩手考古学研究所」を開所すると共に、旧南部（盛岡）藩を研究する「南部史談会」を主宰。謄写版刷り

の会誌「南部史談会誌」を刊行することになります。



「南部史談會誌 創刊号」

その機関誌は郷土史研の基本的文献と評価され、その後、昭和10年（1935）には「岩手考古学会」も組織し、例会での研究発表や史談会と合同での太田村方八丁・太田の古墳・飯岡村古墳等の史跡見学などを実施し、精力的な活動を行っています。小田島氏は「南部史談會誌」創刊号の巻頭言で、郷土史料の少なさを、「偽学者の誤発表」を憂い、「土地の問題は土地のものがやれ」という地元学会の使命や有るべき姿勢を訴えています。特に盛岡城の保存問題については早くから活動を行い、南部家から市への売却問題や城濠の埋立問題などが浮上した際、市民や議会に保存賛成派が少ないにも関わらず、史談会から南部家に保存嘆願書を提出するなど、関係部署や全国へ保存の声を届け、その小田島氏の奔走が功を奏し、昭和10年（1935）10月22日、当時の大矢馬太郎市長から文部大臣宛て、史跡指定の申請がなされ、同12年（1937）4月17日に無事、国指定の官報告示が出されました。

現在、小田島祿郎氏の収集資料については「小田島コレクション」として一括して岩手県立博物館が御遺族から寄贈を受け、考古資料だけでも総点数は6,578件22,435点を数えます。コレクション中、盛岡市内の遺跡としては、川目遺跡の収集資料が最も多く、縄文時代の遺跡では小山・砂溜・里東願寺・猪去・柿ノ木平・豆門・上米内・稲久保・屠牛場・新茶屋・小鳥沢・大館・繋の各遺跡の資料が収蔵されています。



盛岡城跡 垂直写真

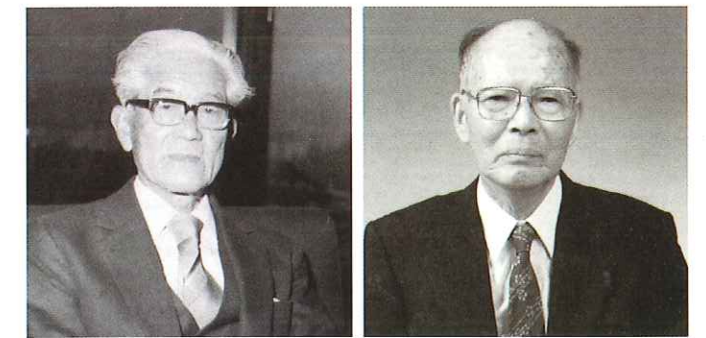
2. 昭和20～50年代の発掘調査

盛岡市で昭和30年代頃には年間1～3件の発掘調査が実施されてきましたが、そのほとんどは岩手大学学芸学部（後の教養部～人文社会科学部・教育学部）の板橋源・草間俊一両教授及び研究室所属の学生諸氏の活動によるものでした。当時、不十分だった行政の調査体制をカバーしていただき、大学研究機関や在盛の研究者の方々を通じて、さらに中央の大学研究機関との繋がりを深めていただく契機ともなりました。

一方、岩手県庁の総務部では県史編纂を手掛けられていた小岩末治氏によって、昭和36年（1961）に『岩手県史第1巻上古篇』を刊行。小岩氏の踏査により以前から収集された資料を元に執筆・編集され、市内では、縄文時代の川目・大館堤・大館・宿田・屠牛場・歳之神・小山・八木田・瀬戸・稲久保・繋遺跡など、弥生時代では銭神沢遺跡などの遺物を紹介され、昭和27年（1952）、9月～11月に大館町遺跡・太田蝦夷森古墳、昭和43年（1968）4月には高館古墳の調査にも携わっています。

その後の動向としては、昭和47年（1972）、岩手県教育委員会社会教育課に埋蔵文化財担当職員が8名配属され、北進してきた東北新幹線・東北縦貫自動車道、そして御所ダム等の建設に伴う緊急発掘調査が実施され、それに呼応するように、周辺市町村にも公共事業及び民間開発の波が押し寄せ、埋蔵文化財担当職員が配置される時代を迎えます。

盛岡市でも猪去館・大館町・柿ノ木平・仁反田遺跡などで発掘調査が実施されましたが、未だ盛岡市では十分な調査体制が整っておらず、昭和52年度に担当職員が配置されるまでは従前どおり、岩手大学や県教育委員会に調査を委ね、とりわけ岩手大学考古学研究会には、発掘調査と整理・報告書刊行に至るまで長期にわたって依頼することとなりました。



板橋源氏（1908-1990）と草間俊一氏（1915-1997）

また調査件数が増大するにつれ、埋蔵文化財包蔵地の周知事業も急務となり、従来1/50,000地形図等で把握していた遺跡の位置を1/10,000の都市計画図にその範囲を明記した基本図を作成し、市庁内関係課及び希望する民間企業等への配布を開始しました。

一方、市民対象の普及活動では、各発掘調査現場での現地説明会や調査経過を公開する機会を設けるなど、また年1回、その年度の成果を公表する速報として、埋蔵文化財調査資料展「盛岡を発掘する」を開催し、併せて成果発表・講演会等を行なっています。

*1 大館遺跡群は雫石川北岸の滝沢台地（火山灰砂台地）に立地する遺跡群。大館堤・大館町・大新町・小屋塚・稲荷町・里館・安倍館・館坂・前九年・宿田・宿田南・宿田南経塚の12遺跡で構成され、縄文時代草創期～後期、弥生時代、奈良・平安時代、鎌倉～江戸時代の各時代の遺跡が存在し、遺跡群の中いわゆる「厨川掘擬定地」も包括されている。
*2 現在は3,000㎡以下の開発行為に対しては試掘調査に限り公費負担としている。

4. 市町村合併と大規模区画整理事業

平成4年(1992)、旧盛岡市に南隣する旧都南村と合併しましたが、旧村には約100余カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、特に河川で形成された沖積段丘上に立地する古代集落跡が多く、急速にベッドタウン化が進み、住宅建築等に係る事前の緊急調査が一気に増大してきました。その最中にスタートしたのが、合併前から懸案であった盛岡・都南2市村に跨る大規模区画整理事業です。市街地の南西部、雫石川の南に広がる約445haの地域に職住近接の新市街地を形成しようという構想で、全体の7割に当たる313.5haを整備する「盛岡南都市開発整備事業(盛南開発)」が開始。事業主体は(独法)都市再生機構(旧地域振興整備公団)で、平成7年11月に着工し、平成25年10月に事業が完了しました。

当該地区には約90haの広さに17カ所の遺跡が存在し、発掘調査は平成5年度(1993)から市教育委員会と県埋文センターによって分担して進められ、平成24年度までのおよそ20年間継続して実施され、古代～中世を中心とする膨大な数の遺構・遺物を確認し、この地域の歴史を考える上で、貴重な多くの成果を挙げることができました。

また、平成8年度からは「浅岸地区区画整理事業」に伴う緊急発掘調査も開始され、柿ノ木平・堰根両遺跡において、平成15年度までに22,738㎡の面積を対象に調査が実施されました。

5. 業務量の増大化と施設管理

調査件数や面積の推移は、棒グラフに見られるように、平成4年(1991)の旧都南村との合併以降、急激に上



上田時代の埋蔵文化財調査室(上田4丁目:現在のの上田公民館)



焼失した厨川小学校時代の文化財調査室(前九年1丁目)

昇し、浅岸地区の区画整理事業の終局を迎える平成15年(2003)頃まで膨大な業務量となり、その後も盛南開発関連の調査が続き、現在に至ってもその資料整理及び報告書刊行に膨大な期日を費やす日々が続いています。

その最中、平成12年(2000)12月24日未明、文化財調査室から、漏電と考えられる原因で建物から出火。厨川小学校の木造モルタル造の旧教室を利用した埋蔵文化財の整理・収蔵施設を全焼。県指定文化財を含む多くの考古資料を焼失・焼損する事故を起こし、数千年の眠りから覚めた貴重な遺物など、国民共有の財産を一瞬にして失うこととなってしまいました。

当時地元紙では「県の文化財行政始まって以来の大きな事故」とし、「膨大な資料を失った責任の重さと文化財保護行政の後退を懸念」と取り糺され、私たちはそれを真摯に受け止め、一刻も早い資料の救出とできる限りの復元を念頭に修復作業を行ってきました。そして平成13年度からは、関係各位の御支援御指導を受けながら、再発防止と災害に強い施設づくりを目指し、国の埋蔵文化財センター建設補助金を導入した施設整備計画を策定し、設計～工事を経て、平成16年(2004)6月に念願の「盛岡市遺跡の学び館」を開館することができました。

II 史跡指定と保存整備

1. 太田方八丁遺跡から史跡志波城跡へ

昭和31年(1956)3月、当時の岩手大学教授板橋源氏は太田方八丁遺跡を踏査し、その成果を『盛岡市史』(1957盛岡市)に報告。論考を加え、全体の地形や竪穴建物跡、出土遺物などから、太田方八丁遺跡は「二重周廓のある方形プランを持ち」、「造営年代は胆沢城・徳丹城の築営年代と同時代か、それよりも降るとしてもほど遠からぬ時代とみなして大過ないもので」、「本遺跡の性格も、蝦夷征討開拓期に関連するものであって、おそらく雫石川を北の隘勇線とみたとた頃の開拓基地」であったとし、「盛岡市地域において、政府の行政力による最初の開拓は太田方八丁から開始されたのである」と古代城柵もしくはその関連施設であることを指摘していました。

しかしその後、太田方八丁遺跡はあまり注目もされず、大規模な開発もなく推移してきましたが、1970年代に入り、全国的に大規模開発事業が計画されるようになると、本遺跡においても東北縦貫自動車道建設や県営圃場整備事業の計画が一気に覆い被さってきました。

東北縦貫自動車道は、ルートが既に決定され、昭和51・52年(1976・77)に岩手県教育委員会によって発掘調査が実施され、それが本遺跡における本格的な発掘調査の始まりとなりました。

調査では、板橋氏が外郭南辺土塁であろうとしたドテツバタケ(土手状の高まりの上に耕されていた畑)の線上に築地塀の寄柱列(当時の所見)、外周痕跡とした場所に外大溝が検出され、その成果は直ちに注目され、古代東北史上の謎の一つだった「志波城」の有力な候補地とされました。

他にも多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが検出され、出土遺物から胆沢城・徳丹城と同じ年代の遺跡であることも裏付けられました。

この事態について文化庁・岩手県教育委員会、道路公団による協議がなされ、当初は全面を6mほど土盛りする計画であったのに対し、ルートの変更・高架方式・遺跡の下をトンネルで抜くなどの案



外郭東辺の築地跡(昭和30年代:現在の県道藤根線)

も検討されましたが、ルート変更は、道路予定地の用地買収が済んでいること、雫石川の橋脚設計が完了していることなどから不可能とされ、最終的には遺構を埋没させる面積を少しでも避けるため、設計変更を行い、高架式の工法が採用されました。

この頃、地元紙では、文化面ばかりでなく社会面、社説等で繰り返し志波城について報道を繰り返し、その調査成果を解説するばかりではなく、岩手を代表する歴史遺産としての保存を呼びかけています。見出しでは、「太田方八丁は志波城跡」・「幻の志波城」(昭和51年2月1日)、「北端の城跡を解明 盛岡・太田方八丁遺跡」(昭和52年7月10日)、「内城をもつ典型的な古代城さく 志波城見方強まる」(昭和52年8月26日)、「社説・志波城の歴史的意義」(昭和52年9月2日)などの記事が掲載されました。



東北縦貫自動車道と志波城跡

Ⅲ 発掘された盛岡

i 旧石器時代から縄文へ

小石川遺跡 (盛岡市玉山区藪川字外山地区内)

岩洞湖のほとり、小大尺山北側の麓に位置する国道455号線の南側にある遺跡で、昭和51年(1976)、在盛の研究者武田良夫氏が道路際の切通しから石器を発見したのがきっかけとなり、その後、昭和55年(1980)に玉山村教育委員会が調査主体となり、菊池強一氏を団長とする遺跡調査団が組織され、発掘調査が行われました。

その結果、珪岩製の尖頭器や頁岩及び黒曜石製の石核及び剥片が多数発見されました。尖頭器は槍先、石核は石器の素材となる母岩、剥片は石器を作る時に砕かれた破片ですが、周辺からは微細な木炭片の出土も確認されていることから、在地の石材と奥羽山系の石材を持ち込み石器製作を行いながら狩りを行ったキャンプサイトの性格で、石器が発見された地層の年代から、およそ13,000年前の遺跡と考えられます。



小石川遺跡遠景



出土した尖頭器・石核・剥片など (当館蔵)

大橋遺跡 (盛岡市玉山区藪川字亀橋地区内)

岩洞湖の北岸、相ノ山の麓に位置する遺跡で、近隣には近世の街道の指標となった一里塚や縄文時代早期以降の遺物を出土する岩洞湖C・D・E・G・H・Iの6遺跡が位置していますが、G遺跡隣には家族旅行村があり、夏はキャンプに訪れた人々で賑わいます。

大橋遺跡は、岩手町の研究者高橋昭治氏が、昭和56年(1981)頃から岩洞湖周辺で分布調査を実施し、数地点の遺跡を発見した中のひとつで、相ノ山北西側の湖畔の粘土層中から遺物が採集されました。

この遺跡からは、ナイフ形石器や細石刃及び剥片が発見されていますが、細石刃の出土層位は、岩手山を噴出起源とする分火山灰中の小岩井浮石層の下位から洪民火山灰上位の間で、年代はおよそ13,000年前と考えられます。



大橋遺跡遠景



ナイフ形石器と細石刃 (個人蔵)

大新町 (大新) 遺跡 (盛岡市大新町地区内)

昭和44年(1969)秋、武田良夫氏が仕事帰りに大新町内で縄文時代の遺物を出土する地点と目していた箇所に住宅新築工事が始まることを察知。即刻施主と交渉し、翌日吉田義昭氏のほか、岩手大学の草間俊一氏と学生諸氏も駆け付け、発掘調査を実施したというエピソードが残っています。

大館遺跡群の大館町・大新町・大館堤・小屋塚遺跡は南面する緩傾斜面の火山灰砂台地(滝沢台地-高松段丘)の南縁に位置しており、南西部の大館町遺跡と北東部の大新町・小屋塚遺跡では約5mの比高差があり、また標高135m付近で遺跡を横断する小規模な段差も形成されています。その後、市教育委員会では、昭和60年(1985)に武田氏らの調査地点より一段低い段丘縁辺部に近い第19次調査区から、爪形文土器を主体とする縄文時代草創期の遺物包含層を初めて確認しました(写真右:調査区の奥上段が昭和44年(1969)の武田氏らの調査箇所)。層位的には、早期前葉の押型文・沈線文系土器群を包含する層位と下層の小岩井浮石(KP)の中間層で、イレギュラーにうねる硬い褐色火山灰層中からの出土でした。

遺物の分布から遺跡は約100m四方の狭い範囲に限定され、遺物包含層から縄文時代早期前葉の押型文土器群・沈線文土器群及び後出の貝殻文土器を出土し、平成元年度の調査では、小柱穴を伴った隅丸長方形の早期の竪穴住居跡も検出されています。



①

②



復元された草創期の爪形文土器 (第21次調査:昭和61年)



大新町遺跡の発掘風景 (第19次調査:昭和60年)



左上:並列して検出された早期の竪穴住居跡(中央部)
上:押型文土器(横線V字状文)ほか
左①:撚糸文施文の砲弾状尖底土器
左②:沈線文土器(帯状X字状文)

盛岡周辺の史跡・遺跡調査関係年表 【 】は新聞記事 敬称略

西暦	年号	月日	調査遺跡・成果・出来事	調査者・報告者・参加者	出典
1672	寛文12	4月22日	志和郡徳田村狄森古墳で太刀・金具類を掘り出す [一 志和郡徳田村之内二、自在古雖夷塚有来と、夷塚之証拠不分明也、寛文十三年卯月廿二日藤沢村畑中藤二郎と申者、土入用有之彼塚掘候処、夷太刀一腰、金具共掘出、則其所之代官片岸庄左衛門献上之、因茲古来より謂伝夷塚無疑所明白也]		「雑書」寛文12年4月22日条
1787	天明7	7月	盛岡藩勘定所より領内代官宛「名石」調査を申付 雷斧・雷環・雷ヒ等々		伊能嘉矩「旧記に著れたる南部領内石器時代遺物」
1801	享和元	9月4日	太田方八丁附近より大形土器出土 高さ三尺 周一丈三尺 口径三尺八寸		「飯岡鹿妻穴壺乃由来」
1886	明治19		神田孝平、福島・山形・秋田を経て岩手に遊ぶ		人類学雑誌2-61
1891	明治24	5月25日	勸業場内に物産陳列場を開設		
1893	明治26		島村孝三郎、岩手県下の古墳及び石器時代遺蹟を踏査 九戸軽米・西磐井・胆沢・稗貫・盛岡方面	島村孝三郎	
1896	明治29		近藤金次郎、「岩手県下石器・土器出所地名表」発表(遺蹟総数74箇所)	近藤金次郎	考古学雑誌1-10
1897	明治30		「日本石器時代人民遺物発見地名表」第一版刊行(岩手県関係遺蹟総数19箇所)		
1898	明治31		「日本石器時代人民遺物発見地名表」第二版刊行(岩手県関係遺蹟総数79箇所)		
1899	明治32		紫波郡徳田村蝦夷森古墳発掘さる		
1901	明治34		「日本石器時代人民遺物発見地名表」第三版刊行(岩手県関係遺蹟総数122箇所)		
1904	明治37	5月1日	岩手県物産陳列場開場		
1906	明治39	9月15日	盛岡城跡に「岩手公園」開園		
1907	明治40	9月	岩手県物産陳列場を「岩手県物産館」と改称		
1914	大正3	4月20日	岩手県物産館、内丸に落成竣工式		
1917	大正6		「日本石器時代人民遺物発見地名表」第四版刊行(岩手県関係遺蹟総数200箇所)		
1919	大正8	4月	史蹟名勝天然記念物法を定め法律第4号、勅令第261号(5月)で以て公布、同年6月1日付施行		
		12月	史蹟名勝天然記念物保存法施行規則を内務省令第27号で定め、同9年1月1日付施行		
		1月30日	史蹟名勝天然記念物保存要目決定		
1920	大正9	10月18日	県令第44号を以て史蹟名勝天然記念物に関する規定を制定、県報号外第133号で告示、同時に岩手県史蹟名勝天然記念物調査会を設置、夫々役員を任命または委嘱す		
			岩手県史蹟名勝天然記念物調査要目を定め、解説を県彙報に公示す		
		10月末	岩手県下各郡主管主任(郡視学)を招集し、講師として内務省柴田常恵考査員を聘す		
1921	大正10	10月14日	【岩手日報】胆沢城と志波城	小笠原謙吉	
		11月3日	【岩手日報】岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告」第1号刊行		
1922	大正11	3月14日	【岩手日報】志和城と徳丹城	小笠原謙吉	
		10月	【岩手日報】岩手県と先住民族	小笠原謙吉	
1923	大正12	2月	【岩手日報】本県の古墳に就いて	小笠原謙吉	
		7月17日	柴田常恵、岩手郡一方井村方面及び紫波郡見前村附近竪穴住居址調査		
		9月	梅原末治来県、紫波郡狄森古墳等調査	岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告	
			盛岡市東中野小学校校庭から多数の土器・石器出土		
1924	大正13	11月15日 ~16日	厨川柵擬定地(里館遺跡・安倍館遺跡) ※字里館 加藤三五郎氏の畑地 焼土・土器片	菅野義之助	

西暦	年号	月日	調査遺跡・成果・出来事	調査者・報告者・参加者	出典
1924	大正13	12月9日	門・肴町・都南村龍源寺の「シダレカツラ」3本、国の天然記念物に指定		
1925	大正14	4月7日	岩手県史蹟名勝天然記念物調査委員の調査区分を分担制とす		
		6月25日	【岩手日報】方八丁に就いて	小笠原謙吉	
1926	大正15	10月18日	【岩手日報】方八丁の古蹟を尋ねて 二	鈴木定次	
		1月28日	【岩手日報】志和城址の鍵か	本田久太郎	
1927	昭和2	6月18日	6月18日から3日間、岩手師範学校で第1回岩手県史料展覧会開催(考古資料多数出陳)		
		9月3日	竜谷寺のモリオカシダレ、山岸のカキツバタ群落、国の天然記念物に指定		
1928	昭和3		「日本石器時代人民遺物発見地名表」第五版刊行(岩手県関係遺蹟総数622箇所)		
		12月21日	紫波郡徳田村狄森古墳を史蹟に仮指定(県告示第677号)		
1929	昭和4	2月21日	【岩手日報】岩手郡の方八丁は果たして古代城郭か	田中喜多美	
1930	昭和5	7月	小田島禄郎、教職を辞し、盛岡市内に転居	小田島禄郎	
		12月17日	【岩手日報】方八丁遺蹟の検討	小笠原謙吉	
1931	昭和6	6月26日	【岩手日報】志和城址研究の行進	小笠原謙吉	
		12月29日	菅野義之助、紫波郡赤沢村舟久保洞窟発見され、29日菅野義之助現地調査	菅野義之助	
1932	昭和7	1月下旬	小田島禄郎、紫波郡舟久保洞窟調査	小田島禄郎	
		1月23日	盛岡史談会誕生		
		5月29日	【岩手日報】菅野義之助、赤沢村漆山で洞窟遺蹟を発見	菅野義之助	
1933	昭和8		盛岡市浅岸柿ノ木平地内の市上下水道工事現場より多数の土器出土		
		9月6日	【岩手日報】奈良朝の遺蹟・飯岡で古墳発見	菅野義之助	
		10月21日	南部史談会発足 「南部史談会誌」刊行	小田島禄郎	
		12月21日	【岩手日報】盛岡市上米内上下水道水源地附近から土器出土		
1934	昭和9	3月30日	岩手県立図書館に「岩手考古学会」発足 会長高橋龍胆 副会長奥 四郎	小田島禄郎	南部史談会第4号
		8月5日	岩手考古学会、岩手郡太田村方八丁及び古墳群を踏査		
1935	昭和10	10月22日	盛岡市長、大矢馬太郎より文部大臣宛、史蹟指定の申請がなされる 指定調書は岩手県史蹟名勝天然記念物調査委員の菅野義之助が記述	大矢馬太郎 菅野義之助	
			川目遺蹟踏査(詳細不明)	小田島禄郎	
1936	昭和11		岩手県史蹟名勝天然記念物保存会功労者を表彰		
1937	昭和12	4月17日	「盛岡城址」国の史蹟に指定 (官報告示)文部省告示第212号		
1940	昭和15	9月8日	聖戦銃後博覧会、内丸の県物産館等で開催		
		5月21日	小笠原謙吉死去		
1942	昭和17	12月21日	県、金属回収に備え、寺院の由緒ある梵鐘15個の永久保存を決定		
1943	昭和18	5月1日	上の橋・下の橋の擬宝珠を金属供出のため、一旦取り外す		
		7月13日	菅野義之助死去		
1944	昭和19	1月16日	【岩手日報】志波城跡考	山本賢三	
1945	昭和20	8月3日	上の橋「青銅擬宝珠」18点、文部省重要美術品に指定		
1948	昭和23	3月31日	安倍館遺蹟(厨川柵擬定地)に市営住宅70戸完成		
		4月	岩手史学会発足		
1949	昭和24	10月	奥羽史談会発足		
		12月31日	安倍館と青山町に市営住宅40戸完成		
1950	昭和25	3月31日	安倍館に引揚者住宅50戸完成		
			文化財保護法制定		

考古学関連一般書・論文・雑誌及び遺跡発掘調査報告書目録(盛岡市分)

No.	刊行年		著者・執筆	遺跡名・論文名・書名	所収報告書名・雑誌名・巻数・号数	発行
	西暦	年号				
(1) 記録・一般歴史書・学会誌・雑誌等						
1	1719	享保4	佐久間洞藏	奥羽観蹟聞老志		
2	1801	享和元	大巻秀詮	太田孝太郎校訂「岩手郡栗谷川縣」『邦内郷村志』	南部叢書第五冊	
3				鹿妻穴堰由来記		
4	1806	文化3	三輪秀福・阪牛助丁・梅内祐訓	太田孝太郎校訂「厨川柵 嬭戸柵」『舊蹟遺聞』	南部叢書第七冊	
5	1818—1860年間	文政—安政年間	横川良助	「一五 飯岡通方八丁の古跡」「一六 勾当塚、勾当の淵」「一七 大釜村」「一八 源義経討死」「一九 源頼朝厨川柵に入る」鹿角郡日記 奥南日記抜卒 卷之二 『内史畧 前五』『内史畧 前十二』『盛岡砂子』『内史畧前十九』	『岩手史叢第一巻』『岩手史叢第二巻』『岩手史叢第三巻』	
6	1833	天保4	星川正甫	上關光三校訂「河西 厨川館 八幡宮 方八丁里館 里館稻荷社」『盛岡砂子』	南部叢書第一冊	
7	1879	明治12	岩手縣	『巖手縣管轄地誌』卷之七		
8	1887	明治20	神田孝平	人類学雑誌		
9	1899	明治32	志村義玄	岩手県史談		
10	1901頃	明治34頃	江刺恒久	奥々風土記	南部叢書第一冊	南部叢書刊行會
11	1906	明治39	吉田東伍	陸中巖手郡	大日本地名辞書第七巻奥羽	富山房
12	1911	明治44	伊能嘉矩	旧盛岡藩時に於ける石器の調査	人類学雑誌27-507	
13			伊能嘉矩	旧記に著れたる南部領内石器時代遺物	人類学雑誌32-424	
14	1916	大正5	岡部精一	前九年の役と後三年の役 『奥羽沿革史論』日本歴史地理学会編		仁友社
15			藤原相之助	日本先住民族史		
16	1918	大正7	笠井新也	考古学雑誌		
17	1921	大正10		岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告第1号		
18	1922	大正11		移住民開拓遺跡の紹介	巻堀村誌(謄写)	巻堀尋常高等小学校
19	1923	大正12	小笠原謙吉	飯岡村に於ける飯岡館址、砂子塚、経塚(紫波郡)	史蹟名勝天然記念物調査報告第3号	
20	1924	大正13	小田島祿郎	岩手県下の竪穴及チャシに就いて	岩手県史蹟名勝天然記念物調査報告第4号	
21				蝦夷館遺跡	岩手郡米内村史蹟名勝(筆写)	米内尋常小学校
22	1925	大正14		厨川郷土史(謄写)		厨川尋常高等小学校
23				墓場遺跡・猪去館遺跡・蝦夷森古墳	太田村史蹟名勝天然記念物調査要項(謄写)	太田村尋常高等小学校
24	1926	大正15	小笠原謙吉	蝦夷森古墳(岩手県太田村)現・盛岡市	史蹟名勝天然記念物調査報告第7号	
25			小笠原謙吉	岩手郡太田村蝦夷森古墳	岩手県史蹟調査報告第7号	岩手県史蹟名勝天然記念物調査会
26	1929	昭和4	小笠原謙吉	中羽場史蹟遺物	史蹟名勝天然記念物調査報告第9号	
27	1930	昭和5	小笠原謙吉	方八丁遺跡	史蹟名勝天然記念物調査報告第10号	
28			小笠原謙吉	乙部館址	史蹟名勝天然記念物調査報告第10号	
29	1931	昭和6	山本賢三	陸奥話記の作者及び著作の年代	歴史と国文学5-3	
30	1934	昭和9	小田島祿郎	先史時代より藤末に至る文化流入の経路と普及状態	南部史談会誌6-12号	南部史談会
31	1935	昭和10		往昔本村を遡歩した蝦夷の実体・本村の蝦夷は何処へ行ったか・本村の史的展望	朝敵に額づく	太田村役場
32	1936	昭和11	板橋源	古代城柵の立地条件	古代文化7の4	
33			伊能嘉矩	嬭戸考	『岩手毎日新聞』大正14年1月26日～1月27日連載	岩手毎日新聞社
34			菅野義之助	厨川の柵	『岩手毎日新聞』大正14年1月10日～1月20日連載	岩手毎日新聞社(奥羽史談会1958『奥羽史談』第21号に再掲載)
35			菅野義之助	「陸奥移民開拓史の概要」と「志和城址を推定する迄の仕方」に就いて—岩手県を中心として—	史潮6-2-121	大塚史学会

No.	刊行年		著者・執筆	遺跡名・論文名・書名	所収報告書名・雑誌名・巻数・号数	発行
	西暦	年号				
36				遺跡 小山館・日影見石・安庭館・門・葛西館・小学校校庭 石器石鏃	中野村中野郷土教育資料(筆写)	中野尋常高等小学校
37				遺跡 大字川目・戸中館 土器・石器 大字築川・上館 大字築川・下館 大字蝦夷屋敷 土器・石器	岩手郡築川村郷土教育資料	川目尋常小学校
38	1940	昭和15		蝦夷竪穴・玉山日ノ戸字古屋敷山谷川目 チャシ	玉山村郷土教育資料(謄写)	玉山尋常高等小学校
39				乙部村郷土教育資料(筆写)		乙部尋常高等小学校
40				遺跡 上飯岡羽場湯沢(畑地) 石器・土器・土師器 上飯岡古墳(高館) 厨手刀・切子玉 飯岡新田古墳(蝦夷森)	飯岡村郷土教育資料(筆写)	飯岡尋常高等小学校
41	1941	昭和16	小笠原謙吉・武田彩吉・田中喜多美執筆	岩手郡誌		岩手県教育会岩手郡部会
42	1948	昭和23	菅野義之助	稿本西磐井郡郷土史		
43	1949	昭和24	鈴木博	岩手史学研究		岩手史学会
44				胆沢の歴史		
45			田中喜多美	岩手史学研究		岩手史学会
46	1951	昭和26	田中喜多美	盛岡市史 第2分冊中世期第一章安倍期		盛岡市
47			盛岡市編纂委員会	盛岡市史 第1巻 総説先史期 開拓期 中世期		盛岡市役所
48			小岩未治	盛岡市大館堤遺跡調査報	古代11	早稲田大学考古学研究会
49			斎藤忠	日本古墳文化資料総覧		
50	1953	昭和28	千葉司男	川目遺跡調査概況	大洞3-43	岩手大学考古学会 岩手大学大洞史学会
51			千葉司男 菊池満	岩手郡浪民村出土土器について	大洞1-18	岩手大学大洞史学会
52			吉田義昭・草間俊一	考古学提要 —岩手県を主とする—		奥羽史談会
53			吉田努	盛岡市築川沢田遺跡	大洞2-2	岩手大学大洞史学会
54			草間俊一	岩手の歴史		
55	1954	昭和29	草間俊一	岩手県川目遺跡調査概報	岩手大学学芸学部年報第7巻第1部	岩手大学
56			小岩未治	盛岡市大館堤遺跡	岩手史学研究第15号	岩手史学会
57				米内の土器・石器	米内の歴史(謄写)	盛岡市米内青年会
58			板橋源	陸奥安倍氏考	岩手史学研究第20号	岩手史学会
59			草間俊一	岩手県川目遺跡調査報告(第二報)	岩手大学学芸学部年報第9巻第1部	岩手大学
60	1955	昭和30	小岩未治	岩手太田村蝦夷森古墳調査報告	季刊岩手史学研究第18号	岩手史学会
61			小岩未治	岩手県内陸の早期縄文式土器	岩手史学研究第19号	岩手史学会
62			小岩未治	岩手県内陸部出土早期縄文式土器目録(仮題)	岩手史学研究19	岩手史学会
63			吉田義昭	岩手県岩手郡繫遺跡	日本考古学年報4 昭和26年度	日本考古学協会
64			草間俊一	岩手県日戸遺跡調査報告	岩手大学学芸学部研究年報第10巻第1部	岩手大学
65	1956	昭和31	小岩未治	岩手における土師式文化考(上)	季刊岩手史学研究第21号	岩手史学会
66			小岩未治	岩手における土師式文化考(下)	季刊岩手史学研究第22号	岩手史学会
67			吉田義昭	壘棺と思われる縄文文化中期の土器群	石器時代第3号	石器時代文化研究会
68			吉田義昭	鬼ヶ瀬洞窟遺跡踏査記	奥羽史談6-4-31	奥羽史談会
69				盛岡市産業文化館案内・二		盛岡市産業文化館
70			板橋源	厨川柵解説	図説日本文化史大系 第5巻 平安時代下	小学館
71	1957	昭和32	板橋源	盛岡市史 第1分冊 開拓期		盛岡市
72			小岩未治	早期縄文式文化に就いての一考察—盛岡市大館堤の尖底土器等の遺物—	岩手史学研究第25号	岩手史学会
73			本明陸男	盛岡市浅岸出土異形土製品	奥羽史談6-4-31	奥羽史談会
74	1959	昭和34	板橋源	厨川柵擬定地盛岡市権現坂発掘概報	岩手大学学芸学部研究年報第14巻第1部(1959)	岩手大学
75			板橋源	盛岡市厨川安倍館附近発見刀幣	岩手史学研究第32号	岩手史学会

盛岡市遺跡の学び館 開館10周年 特別展

「もりおか発掘物語」

平成26年(2014)10月11日 発行

編集・発行 盛岡市遺跡の学び館

〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1

TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

E-mail iseki@city.morioka.iwate.jp

URL [http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/
rekishi/manabikan/index.html](http://www.city.morioka.iwate.jp/moriokagaido/rekishi/manabikan/index.html)

印刷

株式会社 白ゆり

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ6丁目1-50

TEL 019-643-6060 FAX 019-643-6065